忘却

雪姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
忘却

【Ｎコード】
Ｎ２１４２Ｄ

【作者名】
雪姫

【あらすじ】
『僕』はある日友人に、２年前に別れた『あの人』が死んだと告げられる。「あの人が最期に逢いたがっていた」と聞き、告別式に出席がその後「忘れることへの不安」が募っていく。

それは友人の電話で知らされた。最愛の人の死。正確には『最愛だった』人の死。もう別れて2年も経っていた。僕に取っては過去の人だった。今も忘れてないけど…。『最期に逢いたがっていたらしいよ』と、友人が教えてくれた。本当かどうか解らない。あの人は寂しがり屋だったから。そんな言葉に騙されて生きてもいない人に逢いに行くことに決めた。友人は『一緒に行こうか？』と言ってくれた。友人は通夜にだけ参加し告別式には参加しないとのことだった。身内ではない自分は告別式に参加するつもりだが、友人は都合がつかないかも知れないが何とかしようかとしてくれていた。しかし自分でケジメをつけなければ意味がないと思い、その申し出を断った。

告別式の当日は快晴だった。あの人は快晴が好きな人だった。

ある日、僕の部屋であの人と肩をもたれ合いながら、2人で雑誌を読んでいた。

「ねぇ、好きな言葉は何？」

僕は不意に気になり聞いてみた。

「快晴よ」

とあの人は視線をこちらには向けずに答えた。

「それ、好きな言葉って言うの？」

「言うわよ。だって私が好きなんだもん」

あの人は僕に向き直って、自信たっぷりの微笑みをした。

「なら、きっと言うんだろうね」

僕とあの人は額を合わせて笑った。

「今日も快晴よ。だから大好き。私はほとんどの日が大好き。雨の日も何も出来ないような気がするけど、それでも出掛けたりお買

い物したりするのが好き」
あの人は窓の方に立ち上がり、僕に背を向けた。夕日を見ているようだった。
「それって、嫌いな日ないんじゃない？」
「あるわよ」
「いつ？」
あの人は僕に向き直って答えた。
「あなたが遠くに居る日」
「え？遠くに居たことなんてないよ？」
「多分、私にしか解らないだろうね」
あの人が遠い目でまた窓の夕日を見た。

未だに、『自分が遠くに居る日』は解らない。このあとに聞くこともしなかったし、その話にもならなかった。一体何のことを言っていたのだろう？

式場はまばらな人しか居なかった。元々身内だけでしめやかに行う予定だと友人から聞いていた。受付に行って記帳をし、香典を渡して香典返しを渡された。出来ればあの人の物は受け取りたくなかったが、断る訳にもいかないので素直に受け取った。焼香の列に並び自分の番を待った。

自分の番が回ってきた。棺桶が少し開いていて顔が見える様になっていた。綺麗な顔で眠っている様だった。昔、自分の横で眠っている時と少しも変わらない横顔だった。唯一変わったのは髪形だけだった。以前の長くて緩いウェーブがかかった髪は少しだけ短くなりストレートに変わっていた。あまり長く見つめても居られなかった。焼香をしなくては。冷静に焼香を2回済ませ、最後の3回目、これで最期だと思ったら思い切り香を掌いっぱいに握り締め、目をギュッと瞑り歯を食い縛ってしまった。数秒そうしていて気が付き、

香を手から離し、もう一度指で取り直して顔に近づけた。遺族にお辞儀をした。あの人の母親らしき人がいた。きっとあの人も母親と同じ年になればあんな感じの顔になるのだろうという想像がついた。やはり何となく似ている。母親は一瞬だけ何かを思った様な顔をしたが、人違いだと思った様だ。写真を見せたとだけあの人から聞いたことがあった。そして式場を後にした。涙も出なかった。

家に着き、ドアの前で香典返しの中身を見た。ハンドタオルと塩が入っていた。塩を体に撒かずに家に入った。あの人が家に入ってくるならそれもいいと思った。

しばらくしてからあの人の死を知らせてくれた友人に電話した。

『どうだった？』

「寝てるみたいだったよ」

『辛くなかった？』

「もう愛してる訳じゃないから」

『泣いた？』

「涙も出なかった」

『最期に逢えて良かったんじゃない？』

「よく解らない。そのうち解るかも」

『そうか。解るといいね。じゃあまた』

「うん。ありがとう。じゃあまた」

ある日、あの人は無性に寂しがり屋だった。ずっと僕から離れようとしない。抱きついたまま、首の位置を変え、またずっと動かないままだった。ふと、あの人が言った。

「ねぇ、一緒に死のう」

僕はあの人を抱き締めたまま、凍りついた。しばらく沈黙が続いて、僕はその沈黙を破った。

「もう少し、僕と一緒に生きてみない？」

あの人は僕の瞳をじっと覗き込んだ。僕も一切逸らさなかった。あの人は尚も見つめ続ける。表情は全くない。そして諦めた様な顔をして、目を逸らした。

「…うん。解った。もう少しあなたと生きてみるわ」

結局あの人は誰とも死なず、独りで死んでしまった。別にあの時、死にたくなかったからあんなことを言った訳じゃない。あの時に一緒に死んでも良かった。でも、出来ればあの人にまだ生きていて欲しいと思った。だから僕は「一緒に生きよう」と言った。今でも時々思い出す。あの時の選択が正しかったのかどうか。ただ、答えは永久に出ないままあの人は独りで死に、僕だけ生き残ってしまった。あの人に何があったのか怖くて聞けないまま僕はあの人と別れてしまった。

その日の夜、夢を見た。あの人が出てきた。病院のベッドの上であの人が横たわっている。僕はそれをただ見ている。するとあの人が言った。

「逢いたかった…」

と言って僕を抱き締めた。しかし、僕はされるがままだった。僕には解っていた。あの人が寂しくてそんなことをしているのが。そして、もう1つ、あの人は決して僕のことをもう愛していないことが。それが無性に悲しかった。あの人はそんな人だった。でも、それが解っててもも、僕はあの人が好きだった。振り解くことも出来ずただただされるがままだった。

目が覚めた時、生々しくあの人の肌の感覚が残っている。昔と変わらない肌の柔らかさ、あの人から香る愛用のシャンプーの香りが同時に蘇る。確かに夢の中で会話をした。でも、声が思い出せない。いつの間にかあの人の声を忘れていた。朝から小さなショックがあっても、いつも通りに仕事には向かわなければならない。冷静なつ

もりで用意して家を出たが、携帯を家に置き忘れてきた。

僕はあまり自分の話を会社の人にはしない。したくないわけではなく、僕の話に需要があると思えないだけだ。同僚や先輩達と昼休みに昼食を取りながら、人間の記憶の限界の話をした。

「人間のメモリは個人差があるけど、その容量を超えないように、日々必要のない記憶は消去されていくんだってさ。人間の脳ってよく出来てるよな」

そう先輩が言った。僕は内心ビクビクしながらその話を聞いていた。解っていたことだけど、認めたくなかった。僕の脳は確実にあの人の記憶を必要ないものと判断しているらしい。夢の中であの人の顔の唇の部分しか思い出せないことに気が付いた。人間は忘れていく生き物。昔のこともイイ想い出にしてしまう生き物。前に負った傷もかさぶたにしてしたたかに生きていく生き物。でも、それは少し寂しい気もする。でも、そうじゃないと生きていけない生き物でもある。自分が現にそうして生きている。

友人から電話があった。

『生きてる？』

開口一番こう言った。

「何とか生きてるよ」

『余裕で生きてなきゃ駄目じゃん』

「いいじゃん、別に」

少しぶっきらぼうに答えた。

『いいんだけどさ。あの人の葬式、行ったばっかりだし、どうなのかなって。何か心境の変化とかない？』

「ない、ことはない、かな」

『引っかかるんだ』

「そんな感じ」

図星を突かれて素直に答えた。
『昔、あの人とと別れた時、居なくなっちゃうんじゃないかって思ってた。死ぬんじゃないか、とか。だってあの時、魂抜けたみたいだったもん。本当、今生きてるのが不思議なくらい』
「だから、時々『生きてる』って聞くの？」
『そうだよ』
少しむくれた答えが返ってきた。
「そりゃ、ご心配お掛けしました」
『何て言うか、居なくなったらつまんないなって思ってるだけだから。長生きしろよ』
「お互いにね」
『で、何が引っかかってるの？』
「この、居なくなって寂しいって気持ちはそのうち忘れちゃうのかなって。人間って悲しくて残酷な生き物だなと思ってさ」
『そんなことないよ。ずっと忘れずにいたら生きていけないよ。少しずつ時間が悲しみだけ過ぎながら持っていってくれるんだよ。そうじゃないと、みんな死んじゃうよ』
「あの人、本当に逢いたいって心から思ってたのかな？」
今まで考えていた疑問を口に出してみた。
『え？』
「あの人は寂しがり屋だから、誰も側に居なくてそんなこと言ったんじゃないかな？僕のことなんかもう、何とも思ってなくてその時までずっと忘れてて…」
それを遮るように友人が言った。
『そうかもしれない、って言ったら、寂しくない？』
「寂しいかも…」
『だから、本当に逢いたがってたって思っておけば、嬉しくない？』
「嬉しいかも」
『良い方に騙されておこうよ。そういうこと』

「うん。騙されておく」
『じゃあまた電話するよ。またな』
「またね」

少し元気が出てきた。長電話をしたから夕飯を作る時間がなくなってしまった。といってもそんなにちゃんと作るわけじゃないけど…。いつも以上に簡単な物にしよう。そういえば、よくあの人に料理を作ってあげた。あの人は『いいんじゃない』とだけ言ってくれた。全部食べていたから、不味くはなかったんだろう。あの人が『お腹空いた』と言って慌てて作らされたサラダそうめんを作ろう。

数日後、友人が遊びに来た。大量のお菓子を買い込んで。
「遊びに来てやったぞ！」
「そんなに威張らなくても」
「お菓子もあるぞ！」
「ありがとう。解ったから。どうぞ」
「おじゃまします」
大量に買い込んできたお菓子を出し、お茶を出していると
「いいねぇ、嫁に欲しい」
「お前のところの嫁だけは絶対嫌だ」
思い切り断らせてもらった。
「何でだよ？」
「…何となく。結婚する気、まだないからかな」
「…」
2人で黙ってしまった。気まずくなったので、
「別に嫌いな訳じゃないから…」
「解ってるよ、真剣に答えんなよ、ちょっとからかったのが恥ずかしいじゃん」
「…ごめん」
「謝んなよ、もういいよ。とりあえずお菓子食べよう、チョコレ

ート食べよう」
と言いながら、箱を開け、中の袋を開けチョコレートを美味しそうに食べ始めた。
「やっぱメルティキスは美味いな。冬になると期間限定いつも買っちゃうんだよな。…したことある？」
「何を？」
「メルティキス。溶けるような口づけ」
「あの人のはいつもそうだったよ」
「へ～。忘れられないな、そりゃ。…ごめん、墓穴掘ったな、今」
「別に気にしないよ。そっちはないの？」
「う～ん…ないかな」
「ふ～ん。意外」
「何で？」
「そんな経験1度くらいしてるかと思ってた」
「つーか本当は羨ましかったんだ。そんなキスが出来た相手が居て。俺はそんなキスをした相手は居ない」
「相当好きじゃないとそんな味はしないからね」
「そうなんだ」
「味は舌じゃなくて、胸で感じる、みたいな？」
「してみないと解らないってことだな」
「そういうこと」
2人で顔を見合わせ、苦笑した。そして2人同時に口にした。
「恥ずかしい」
「で、引っかかりは取れた？」
友人が不意に聞いてきた。
「まだ、かな」
「まだ、『忘れるの寂しい』って思ってる？」
「もう居ない人のことは忘れないとね」
「…忘れることないんじゃない？」
「え？」

「だって、良い思い出だったんだろ？だったら無理に忘れることないいじゃないか？」
「そうかな？」
「それに、忘れることは別に悪いことじゃないんだよ」
「…」
友人は続けた。
「子どもの頃、友達と仲良くしてたけど、卒業してりして、そのうち話さなくなったりしただろ？色々子どもなりに悩んだりしたけど、色々あってもみんなもう覚えてないだろ？」
「うん…」
「だから、『愛してる』が『愛してた』になってもいいんだよ」
「うん…」
頷きながら涙が出そうになった。
「そういうこと」
友人のいつもの口癖が出た。
「うん…。元気出た」
「よーし。元気になったな。元気には糖分が必要だ。チョコレート食べよう、チョコレート」
「何かこじ付けに聞こえるけど…。チョコレートはカカオバターが原料で油脂だし」
「何か言った？」
「ううん。好きだね、チョコレート」
また2人で笑ってしまった。でも、今度は呆れ笑いだった。

友人が帰った後、告別式で貰った塩を探し出し、家の外に出た。手にしていた塩を頭から自分に振り撒いた。
「…さよなら…」
今日は快晴。あの人の好きな日。今日はあの人が嫌いと聞いて以来作らなかったグラタンを作ろう。美味しく食べたら、友人にメールしよう。

『今日から少しずつ『愛してた』に変われそうだよ』

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2142d/

忘却

2011年1月6日14時13分発行